

画僧月船宗継とその周辺

Gessen Sokkei, painting priest and people around him

蔭 木 英 雄

一 はじめに

東山時代に活躍した五山文学僧といえ、横川景三・桃源瑞仙・彦龍周興・景徐周麟らに指を屈しなければならないが、彼等が生活する禅宗寺院を統べるのは鹿苑僧録であり、下剋上時代にあつては蔭涼軒主であつた。従つて『蔭涼軒日録』（以下『日録』と略記）は京都禅林の貴族的生活を探る一等史料であり、五山の稜線に開く詩の花の意義を明らかにする為には、多方向から照射せねばならない文献である。美術史には門外漢の筆者がここに月船宗継を取り上げたのも、五山文学を成立させた時代の風景を、『日録』からわずかなりとも浮かび出させた意図からである。画僧をとり上げて文学の底辺世界を点景しようとするのであるから、焦点の定まらない立論となるのが予想される。よつて、『その周辺』という題語を付けて言い訳とした。

月船宗継は『日録』には継・継月船・北房・喜多坊の名で登場する。彼の生没年月は残念ながら明確にし得ないが、彼の名が『日録』

画僧月船宗継とその周辺

に見えるのは文明十六年九月十八日からで、この日、集柏・集丹・有桂（後述）ら（いずれも『日録』筆者の亀泉集証会下の人）と共に清水寺に参詣している。しかし、この時点より十九年前の寛正六年十月八日の記事に、

宗湛上座、その子書を被むり其の敵を摘う。定めて余党有らん云々。

とある小栗宗湛の子が宗継その人であるなら、寛正六年以前の誕生という事になる。

月船宗継の文献上の足跡は、禅徒として亀泉集証に参侍した事、医業に携わつた事、画人としての業績、の三つに分けることが出来よう。

二 禅僧月船宗継

景徐周麟筆の『鹿苑日録』八長享二、正、二ノに、初更に坐禅す。定鐘已後の住持の坐禅、八鼓に及びて方丈に帰る」とあるように、禅

一

僧の日記であるからには、僧堂に於ける坐禪修行とか、公案工夫とか、師家のもと入室して鉗錠を受ける話柄などが記されて当然と思ふのだが、^①「日録」が、(1)將軍の秘書とも言うべき蔭涼軒主の先例故実の備忘の為のもので、(2)室町中期以降の禪僧は、本寺僧堂から離れて塔頭・寮舎での生活が主となっていた実態、などを考えると、『日録』に対する筆者の期待などは見当違いという事になる。わが月船宗継に關しても、禪院での社交生活の記録の連続で、禪客(住持が上堂說法する時の試問者)の練習をした記事が二箇所見えるのみである。その一を讀んでみる。言う迄もなく原文は漢文(相当和臭化されている)で書かれているが、原漢文を如何に読解したかは、解釈学的研究の累積のない分野の論文には必要な条件であり、又、小稿が多くの人に読まれる為にも、以下、注を除き意訳的書き下し文で記す事とした。原文の必要な読者は入手し易い統史料大成本を参照して頂きたい。

文明十七・十一・八。参上せず。冬至節なり。未明の行事は恒の通り。開山(夢窓国師)諷經畢り、草飯上堂(冬至など四節には住持が法堂に上り說法)。禪客は慈昌并びに愚(龜泉)・樹・繼(月船宗継)・悟・哲が光伴。何と汾陽の六人(宋の汾陽善昭は、弟子が僅か六人でも接化につとめた)と同じではないか。呵々。斎罷り問禪・答話の練習。集樹首座は釣語(問答の初めに師家が唱える語)に、「わしの這の紙被には元来一縫も無い。試みに線路を通して看よ(不立文字の禪の心を、糸を通すように言葉で表わしてみよ)。如来の教えは冬の如きものではない云々」(中略)練習は無難に終った。茂叔集樹が一樽を携えて上堂問禪を祝い、一衆宴を開き浅斟低唱す。

冬至上堂の行事をやれやれ無事に成し遂げたという口ぶりの文章で、丁々發矢と禪機に火花を散らして問答を応酬したり、百尺竿頭一步を進めるが如き気迫は感得できぬ。なぜこんな感想が筆者の胸中に生じたのか。それは、不許葷酒入山門(にらのような臭い野菜や酒は禪寺に入ってはならぬ)、という結果石を置く禪院で、しかも冬至上堂という大切な日に酒宴を開いているからである。

予は小補(横川景三)に云った、「願わくはこれら美少年たちを席上に置いて盃を傾けたい。然らばわが望みは足りるのだ」(延徳四、三、十八)▽

冗談にしろ、こういう言を吐く蔭涼軒主であった。又、土用に入り大蒜を飲む(延徳二、六、廿五)など、集団修行生活の妨げとなるニンニクを、いくら病弱だからとはいえ、指導的立場にある龜泉和尚は食べているのである。もっとも、龜泉自身、景徐周麟を称えるあまり、蔭涼等の事は此の景徐に於ては下劣の職なり(延徳三、三、十五)と自卑の語をもらしている。つい、指導的立場、と記したが、彼の指導の中心は生死の一大事を究める事に非ずして、幕府権力と繋がる寺院経営の指導であり、庶民生活とかけ離れた閉鎖的社会的維持であり、そして文化学問の指導であった。月船宗継もかかる禪院社会の一員として、諸処の宴席に列なる日々を過ごす。

庭前の杜鵑花が満開なので宴を催す。樹・丹・繼・悰・守林院及び愚。浄光院尼衆も亦宴に列なる。(中略)鴨川に溺死者二人。棕子見て驚嘆する。(文明十九、三、九)▽

小補和尚來臨、宴を開く。座中戲言ばかり。(中略)柏・丹・繼・桂

・藤・康及び愚の七員なり。△長享二、正、六▽

枚挙に遑がなく、また莫迦々々しいので多くは記さないが、午前に続いて午後も宴会に出かけ、溺死者の出る大雨の中でも酒をくらい、時には尼衆も同席し、座中は冗談ばかりが飛び交い、連飲により頭痛起る。△文明十九、三、九▽という有様であった。彼等はいつ已事究明や悟後（仮に悟ったとして）の聖胎長養につとめるのであろうか。

ところで、禅院内での宗継の地位は何であったか。禅宗寺院には住持の下に東班（経営担当）と西班（修行を掌る）とがあり、宗継が属する西班には、首座・書記・蔵主・知客・知殿・知浴の六位がある。

雲沢軒で禅客を習う。継蔵主・成蔵主・哲侍者なり。△文明十八、四、五▽

赤松政則公より杉原十束、継蔵主に恵まる△長享三、正、四▽とあるので、彼は少なくとも四年間は蔵主であった。蔵主とは、

職とする所は何事ぞ。直に須らく宗乘に洞達し、聖教に該通すべし。〔備用清規〕

知蔵（蔵主のこと）の職は経蔵を掌り、義字に兼通す。〔勅修清規〕とあるように、仏教学に精通して經典を管理するのが本来の役目である。ところがこの時代は、宗継の事例ではないが、

春侍者の蔵主、転位の事は、老成により、勝智院殿（足利義政の生母の日野重子）が以前目をお懸けになり、又、一周忌の仏事に当るので、愚老（季瓊真養）が申し上げて、將軍家よりお許しが出た。△寛正五、七、十二▽

宗雲侍者は祝聖より蔵主に転位。蓋し官銭を出すなり。△延徳元、

画僧月船宗継とその周辺

十一、廿九▽

という文章が示すように、年令・権力者の庇護・仏本法要の機会、はては金銭によって地位が得られたのであり、それが幕府経済を支える一支柱でもあった。なにも月船宗継をけなすつもりではなく、禅院の時代相を示す為に記しておく。

三 医薬に携わる

月船宗継は延徳元年（長享三年八月に改元）十月の前後に還俗したのと思われる。根拠の第一は、前述の長享三、正、四の「継蔵主」の名称が同年九月十一日や十月三日には「月船坊」と記され、さらに十月十九日以後は「北房」と書かれている事であり、第二にはこの頃を境として医薬や絵画に関する記述が頻出する事である。

宗継の師の亀泉集証は腹虫を持病としていたので、「日録」には医薬に関する記事が非常に多い。医師は竹田法印・上池院・祐乗坊・清侍従・松井正濟、そして常喜軒の春英寿芳らの名が見え、薬はなんと百四十種類以上の名を数えることが出来る。従って北房（延徳四年九月からは喜多坊と記述）宗継も、亀泉和尚の健康にはずい分苦労している。彼が医薬に関係したのは禅僧時代かららしい。

丹公の『法華経』八巻『聯珠詩格』七冊と、継公の『病源論』六冊とに外題を書く△長享二、八、十▽

宗継の架蔵書の中に医書があった事が判る。

今朝北房が、「和尚は秋冷の時に必ず煩うだろう」と言ったが、そ

の通りに午後秋冷により虫気起る△延徳二、七、廿四▽

清侍従より贈られし神稜丹を服用するが効き目なし。北房曰く、「山椒と塩を煎じて服めばよい。」のむと激しく吐き痛みはやむ。北房曰く、「人の腹中には虫が居り、その尤なるもの九匹、中でも大きいのは虻と蛭と白蟻である」と。△同年八、二▽

これ以降、北房は師の亀泉和尚に集香丸・縮砂散・明香散・丁香円・参香散^⑤・養脾湯・胡黄連丸・良香湯などを贈り、

わが爺（小栗宗湛）は応仁の乱時に花の御所に住んでいて、単に手を噛まれ苦しんだ。將軍様より竹田法印・竹田周防を遣わされたが治らず、たまたま高野聖の練薬をつけて治った。今、和尚の服用なさる薬も必ず効くと信じて服用なさい」△明應二、二、廿八▽

と父を思い出しつつ師の身を案じている。北房は薬劑調合にとどまらず、診療もおこなった。

昌子を北房のもとに遣わす。「福力の病気がひどい。慈悲により来診されよ」△延徳四、五、廿六▽

龍公（松喬真龍）風気。喜多坊を呼び、脈を取り薬を与えしむ△明應二、四、十▽

松喬真龍とは九条政基の息で赤松政則の養子となり、亀泉集証の松泉軒を継いだ人である。このほかにも北房は春陽景杲の死脈をも取っている△延徳四、五、八▽。

四 画人北房宗継

師の亀泉集証は、んからの聯句好みであった。詩宴の帰途、微醺を帯びて横川景三に句を投げかけたり△文明十八、三、一▽、句会から東雲景岱を送る道中で又句を応酬したり△長享三、正、廿九▽、門弟の慈昌と雨だれの音を聞きつつ二十句も連ねている△延徳二、十一、六▽。

灸をすえて苦痛のあまり十字を口ずさむ。「百病従何起 愚哉灸大空^⑥」。すると慈昌はこれに続けて、「万齡於此祝 至矣仰高風^⑦」と詠んだ△延徳四、九、十一▽。

と灸治の熱さに苦しみながら作句するのは、よほど聯句好きでなければ出来るものではない。この師の影響を受けて弟子達も頻りに句会に連なっている。「日録」に見られる二百七十余回の聯句の記述では、茂叔集樹の九十五回、芳洲真春の六十二回を筆頭に、雲英宗悦・盛文慈昌・叔原宗菅・春容慈藤・竺英有桂（後述）らの弟子が常連で、他の門派では東雲景岱や景徐周麟の名が多く見える。還俗して雲沢軒を離れた宗継も、「日録」に関する限り五回列席しているが、残念ながら作品は残っていない。彼はかかる聯句会後の小宴で、尺八を吹き歌を唱して座に興を添えている。芸達者な僧はなにも宗継のみに限らず、悦叟集柏の羅漢舞や春湖宗成の唐人舞など△長享二、二、五▽も満座を陶醉させるのだった。以上、北房をとりまく芸能的環境に少し触れておいた。

さて北房の画業は「日録」から十三点数える事が出来る。

- A 瀑布画軸 長享三、九、九。夏珪様。
 B 四宮宅障子画 延徳二、六、廿五。
 C 御影間障子画 同年七、十九。
 D 養徳院障子画（芦雁図）同年七、廿九。牧溪・夏珪様。
 E 松泉軒屏風画 同年八、五。
 F 松泉軒客殿障子画 延徳三、六、廿九。君沢様。
 G 松泉軒書院障子画（八景図）同年七、廿一。夏珪様。
 H 松泉軒書院障子画（琴碁書図）同年、八、三。
 I 松泉軒御所間障子画（花鳥図）同年八、十一。
 J 慈藤寮障子画 明応元、十、八。夏珪様。
 K 赤松政則の五幅一対絵 同年、十一、十七。
 L 松泉軒軸画 同年十二、十三。
 M 松泉軒書院押板脇画 明応二、三、十。
- Aは宗継の作品と確定出来ないが、月船坊上落。軸画を持ち来り恵まる。蓋し瀑布なり。夏珪様なり。画本は公方に在り云々”という記事によって数の中に入れた。Bの図柄は不明である。四宮四郎は笠懸・犬追物の名手であり、後藤々左衛門や師の亀泉和尚の線からの依頼であろう。Cの障子画も何が描かれていたのかわからないが、亀泉は誠まことに衝楼跨竈と云うものなり。△延徳二、七、十九▽と、父小栗宗湛の伎倆を超えるものと称賛した。Dが京都国立博物館（養徳院旧蔵）の芦雁図と目されるものである。関連の『日録』の文をあげておく。
- 養徳院の障子六枚、北房筆をとる。夏珪様なり。誠に嘉尚すべきなり。今日完成す△延徳二、七、廿五▽

画僧月船宗継とその周辺

養徳院の障子四枚、芦雁は和尚様（牧溪和尚）なり。北房今日より筆をとり始む。二枚はこれより先、自牧（小栗宗湛）画く。△同月廿六▽

養徳院の障子五間の画、今日全備し養徳に贈る。△廿九日▽
 盛文慈昌が云うに、養徳の春浦禪師は曾て自牧宗湛翁に命じて、芦雁を禅室障上に画かせた。近日その室を繞いで広くし、湛翁息宗継に絵事をつあがせた。これを見る者皆、師を超える作品と美はむ。禪師も感歎のあまり一詩を作り継公に謝した。

妙画名高自牧翁 妙画 名は自牧翁より高く

親伝家法不如公 親しく家法を伝うるは公に如かず

棹舟急欲招寒鷹 舟に棹さし急ぎ寒雁を招かんと欲すれど

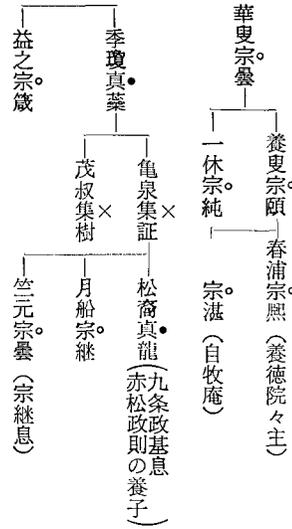
雨暗湘江蘆葦東 雨に暗し 湘江芦葦の東

という七言絶句なり。△同年、八、十三▽

五間の養徳院の障子画十枚のうち、既に二枚が自牧翁小栗宗湛により画かれており、北房の夏珪様の六枚は七月廿五日に出来上り、翌廿六日から父の描き残した芦雁図の二枚に取りかかって四日間で完成したのである。養徳院は現在は大徳寺山門のそばにあるが、当時は東山祇園の近くに建っていて、もとは妙雲院と称した寺院である。足利満詮が内室の菩提を弔う為に建立した寺で、満詮の死後、その法号を取って養徳院と改称したのである。院主の春浦宗熙は「大宗禪師行状」（続群書類従）九輯下）によると、「播之赤松真人」とあって、赤松政則や前蔭涼軒主季瓊真葉と同郷人であり、しかも小栗宗湛（次の傍点で明らかなる如く、一時僧籍にあった）とは法系上の兄弟ひんがいにであった。即ち、

画師宗湛という僧有り。愚老(季瓊)に庵号を索む。そこで自牧と名づく。紫野(大徳寺)養叟の弟子となり、禪を修行し画を能くしたからである。牧牛^⑩或いは牧溪和尚の「牧」の字を取ったのである。これを相公に申し上げると感嘆なざり、かくて宗湛は龍光を受けるようになった(寛正四、二、六)。

と記している。法系は



ということになる。(1)季瓊真葉は同郷の春浦宗熙の兄弟である小栗宗湛に自牧の庵号を与え、(2)將軍義政に熱心に推挙して御用画師となる道を開いてやり、(3)季瓊の法嗣で蔭涼軒主を継いだ龜泉集証は、月船宗継のみならずその実子の空三元宗曇(後述)まで弟子としているのである。

筆を少しもどすが、「芦雁図」に感歎した五頁下段の春浦禪師の謝詩はなかなか味わい深い。

舟に乗り寒雁を招こうと思つたが 棹舟急欲招寒鴈
湘江の東は雨に煙る芦葦ばかりだつた 雨暗湘江蘆葦東

という転句は、秋雁画の次の余白(寒雁の無の存在)を詠っており、結句は、一艘の葦舟に棹さして西から来た禪祖達摩(芦葉達摩は禅画に多く、公案には「祖師西来意」がある)の禅風が、東の日本では暗澹たる状態になっているのを暗示している——と読み取るのは筆者の連想過多・妄想分別であろうか。いずれにしろ、春浦和尚はひかし一しよに修行した小栗宗曇の息子の、凡庸ならざる画業を絶賛しているのである。

さて、次のEからMは(I・Jを除き)松泉軒の障子画で、師の龜泉の命によって画筆を執つたのであろうが、Gの八景図は父の画業を継ぐものでもあった。

寛正三年二月、季瓊真葉は雲頂院内に松泉軒を新造し、翌月の將軍の「お成り」に備えて、小栗宗湛に八景図を画かせた。

雲沢軒お成り(中略)松泉軒お成り。四間にて小栗の八景絵を御覧になり、美を称えらる。(寛正三、三、十四)

この湘瀟八景図は、松泉の画障を歴覧する(文明十七、四、十三)の記録によって、文明十七年まで存在していたことは推測されるが、松泉軒で、歴覧したのか、松泉軒にあった画を他所で見たのかは明確でない。しかし三年後に、

愚(龜泉)は、「松泉軒は、明年必ず造立するつもりです」と將軍に言上した。(長享二、八、十一)

というのを読めば、たぶん後者であろう。つまり、松泉軒は応仁文明の戦火で焼失し、長享三年になって再建されたのである。⑩として偶然の一致かも知れぬが、月船宗継が還俗して画業に携わつたのと、松泉

軒再建時期とが殆んど重なっているのは興味深い。

前後するが、Fの客殿障子画は延徳三年六月三日から下絵を描きはじめ、君沢様の筆法であった。和尚様(牧溪様)とか夏珪様・孫君沢様など、美術に味い筆者は画風や技法の相違などとても説明し得ないが、^⑩

君沢の四幅画をは常喜軒より借り画本とす。此の画は讃州(細川成之。画をよくした武将)より来ると云う。北房一見し、「以前は御物にあり、画本とする為公府より出さる。見慣れし画なり」と話す。

一見し塵懐を爽かにする。実にすばらしい。△延徳三、六、十四▽
によると、手本を見ながらの労作であつたらしい。なお、以半という坂東の画師が、今回の制作に関わっていた形迹がある。^⑪

H以下の画業については紙数の関係で割愛せざるを得ないが、Iの花鳥画について一言述べておきたい。この画は八月十一日に描き始めたが、その前日、亀泉和尚は玉潤軒に慈昌を遣わし、周文筆の花鳥屏風を借りている。画題から北房の仕事の参考の為であることは確かである。さらに二年後の明応二年八月十六日、北房はこの花鳥画に筆を加えているが、この前日に、亀泉が千二百疋で購入した君沢の絵を松泉軒で見えており、これが花鳥画加筆の動機のように思われる。

月船宗継は父宗湛より芸術的資質を受け、亀泉集証の手篤い援助をバックに、周文らの伝統を継承し、牧溪・孫君沢・夏珪らの中国画人の筆法を取り入れていった画家で、彼の制作と確認し得る現存作品が稀なのが惜しまれる。

五 宗継周辺の人々

〔家族〕、晩がた九峯と北房来訪。商人が自牧翁の描きし江山画軸を売りに来る。二老と予(亀泉)と三人で其の讃詩を写し軸は返す△延徳三、十、廿四▽と北房宗継は父の画を懐しく見て讃詩を書き写しているが、此の項では父小栗宗湛以外の家族について略記しておく。

還俗した喜多坊宗継はもちろん禅院を離れて生活した。亀泉会下を出た時の住処は不明だが、延徳四年二月九日、武者小路に家を買って移っている。この通りは相国寺のすぐ東南にあり、松泉軒とは五分もかからぬ距離であった。この家の書斎に掲げる為、宗継は亀泉和尚に「宿雲齋」の三大字を書いてもらった△明応二、五、廿▽。父宗湛の時代から小栗家は家族ぐるみで亀泉と交際している。例えば宗継が奈良に滞在した時、留守宅を慰めようと松茸二本・柳酒一樽を贈っており、宗継は子供の宗曇を亀泉会下に入門させているのである。

今日より宗曇沙弥の陪堂を許す。宗康侍者の闕を補う為なり△延徳三、三、一▽。

以後、竺元宗曇は禅客を習ったり、詩会や聯句会に列席したりして、父宗継と同じような禅院生活を送り、明応元年十二月廿七日受衣、翌二年正月七日知客しつかとなった。彼が作った七言絶句しちげんぜつこを紹介しておく。

A 百尺長松清蔭新 百尺の長松 清蔭新たなり
B 乾溝拂々洗炎塵 乾溝払々 炎塵を洗う
C 蒼髯却勝贊公雪 蒼髯却って勝る贊公の雪に
D 蒼髯却勝贊公雪 蒼髯却って勝る贊公の雪に
E

^F 十里風聲夏健人 十里の風声 夏にも人を健ならしむ

A 芳春円柔の起句「百尺長松翠掃緑。」周霖の起句「一樹長松聳碧空。」

B 永殊の承句「清陰可愛歲寒姿。」芳春円柔の転句「清陰一自枉高駕。」

C 周霖の転句「乾瀟夜々襟如洗。」梵伊の転句「乾瀟洗尽煩襟夢。」 D 如

珍の承句「乾瀟今夜洗炎埃。」 E 竹圃宗悟の転句「蒼髯不袖舞絃手。」如

珍の転句「蒼官代我先傾蓋。」高僧伝では晋僧の法潜の勝友の松を蒼髯

叟とか蒼官とか言う。 F 永殊の結句「十里風声黄九詩。」中昇の転句「乾

瀟十里洗炎腸。」

注の芳春円柔とか周霖とか中昇らは詩会に同席の二十五人の僧の名であり、注を付したのは、竺元宗曇の用いた詩句に同席者のものと重複するものが多く（煩瑣なので一部しか挙げていないが）、従って個性的創造的作品とは言い難い事を示す為である。たぶん彼らは同じような抄詩句の用例集の如き参考書）を座右に置いて作詩したのであろう。杜甫「大雲寺賛、公房四首」の「近公如白雪、執熱煩何有、（賛、公に近づけば、白雪のようで、熱さや煩わしさが無くなってしまふ）に拠った宗曇の第三句「勝賛公雪」が、彼の苦心の句であるように見えるが、これとて、長享二年六月十三日、雲沢軒での亀泉の発句に「来近賛公雪 洗除煩暑塵」があるのだった。

〔竺英有桂〕この頃の禅僧は一家意識が強かった。『日録』にも、

雲沢・栖老衆みな意足書院に於て、一家の宴を張る。一時の快なり
△長享一、十、十五▽

という表現が多い。亀泉集証のいう一家とは松泉定衆十五員・雲沢衆七員・栖老衆十員・東班衆十四員の四十六人△延徳四、八、三▽であ

る。本項では北房宗継が嘗てはその一員であった松泉定衆のうち、特に仲の好かった竺英有桂について述べ、当時の禅林風景を点描してみる。

斎罷り柏・丹・継（宗継）・惊・桂（有桂）同途して清水寺に詣る

△文明十六、九、十六▽。

早日鞍馬寺に詣る。同途十員は樹（集樹）・柏（集柏）・継・桂ら

△文明十七、九、廿八▽。

禅僧時代の二人は師について常に行動を共にし、宗継が還俗してから

も、

晩がた竺英（有桂）の新寮開き（中略）。当軒衆皆集る。北房も座に

在りて歌舞能を尽くす△延徳四、正、七▽。

晴れ時、丹（集丹）・桂は北房の新居を賀す△同年、四、九▽。

と互いに新居を祝いあい、ここに列記しきれないほど交際を深めている。

竺英有桂は横川景三の『補庵京華統集』に「赤松子之流亜也」とあるので赤松氏の支族である。そして足利義政が鹿苑院で有桂を指して亀泉に尋ねると、「愚の同宿で季瓊東堂の甥です」△文明十八、七、十五▽と答えているので、季瓊真薬と同じく上月氏の出身である事が判明する。^⑤

有桂は幼時宝林寺（赤穂郡上郡町所在。千種川の下流にあり上流に上月町がある）の塔頭雲龍軒で春芳彦藤の膝下に学んだが、文明十三年に上洛して亀泉の会下に入ったと横川は記す。また、景徐周麟の「聯芳斎記」には、「京師に生まれ、人となり寡黙で閑雅であった」と記す。

文明十四年正月の横川景三の七絶を『補庵京華統集』から抜萃しておく。

竺英少年の試筆に和す

去歲觀光始入京 去歲觀光始めて入京し

一朝万国誦君名 一朝万国君が名を誦す

海棠元是吾郷友 海棠は元是れ吾が郷友

欲睡依花上有鶯 睡らんと欲し花に依れば上に鶯有り

承句は誇張ではあるが、有桂の文名が輦寺に知られていた事を示す。

なお結句は寒山詩の「花上鶯鶯子 関々声可憐」に拠っていて、同郷の後輩をいづくしむ情を表わしている。

有桂は文明十六年十一月落髮受戒して侍業となり、翌年の十一月廿二日意足室（雲頂院書齋）の詩会で乗筆を勤めたのを皮切りに、詩や聯句会で屢々筆を乗った。友の月船宗継の作品が残っていないので、有桂の句を読み彼等の佳会の雰囲気を味わってみよう。一部既述した延徳四年正月七日の『日録』である。

晩がた竺英は新寮を開き予（亀泉）を招待す。葡萄画一幅（北房描くか？）と美濃紙十帖を以て遠大を祝う。小聯有り、

予云く 松社宜仙友（松社仙友に宜し）

竺英云く 梅窓接主人（梅窓主人に接す）

二十句を賦して終る。雲沢・栖老・意足・当軒衆皆集まり、北房も座に在りて歌舞能を尽くす。一時の佳会なり。

亀泉の句の「松社」はもちろん松泉軒を中心とする風雅のグループをさす。仙友は世俗を超越した詩友という語義にとどまらない。

画僧月船宗継とその周辺

彼等は仙人赤松子の名を負う赤松氏（赤松山宝林寺や金華山法雲寺の開基。なおこの両寺の開山雪村友梅は亀泉集証や竺英有桂らの法祖である）に縁故の深い僧達であり、月に生える仙樹の「桂」の道友である¹⁹。従って松社の対の「梅窓」も窓辺に香る梅を詠じているのだが、その裏には雪村友梅を祖とする客僧達、ひいては漢の仙人梅福にまで聯想が及んでいるのである。

かくの如き禅院生活を送る有桂は、延徳四年七月十三日藏主となり、明応二年二月から三月にかけて亀泉が重態に陥ると（後に小康を得る）慈藤や慈昌と交代で徹宵看病した、死期を悟った亀泉和尚が、松泉軒後継者として迎えた松喬真龍の指導教育にも有桂が当った。即ち、真龍の寮房の主事となり、黄山谷の詩を教え、ついには真龍を自分の寮に引き取った（明応二、九、十四）。

〔画師〕狩野正信は『日録』には、狩野助・鹿野大炊助・鹿野性玄・狩野法橋などと記されている。彼については先学の多くの論稿があるが、まず宗継と同様、十三点の業績の一覧表を『日録』から引き出し、試みる。

- a 雲頂院壁画（観音・羅漢） 寛正四、七、十
- b 光明峯寺殿（九条道家）画像 文明十六、十一、十四
- c 東求堂（十僧図） 文明十七、十、廿九より
- d 東求堂（涅槃像） 文明十九、二、十五
- e 足利義尚出陣像 長享三、四、一
- f 桃源瑞仙頂相 長享三、五、廿八
- g 足利義尚像（赤松註文） 同七、四

h 足利義政像 延徳二、正、十一

i 遊初軒座敷画 延徳三、六、九

j 亀泉集証頂相 延徳四、五、二

k 岩栖院座敷画 同六、八

l 亀泉集証頂相 明応二、九、十五

m 季瓊真薬頂相 同九、廿三

a についての季瓊和尚の『日録』^⑩に、鹿野性玄と小栗宗湛の名が同時に出来ており、雲頂院の季瓊真薬や亀泉集証を仲介として、小栗宗湛・宗継父子と狩野正信とが交わった事は、まず間違ひなからう。既述の如く季瓊和尚は小栗宗湛に自牧という庵号を与えたが、正信には性玄と命名した。自牧は牧溪和尚という南宋の禅僧から、性玄は呉道玄という唐の道士に拠って命名したのは、対照的でなかなか味わい深い所行である。渡辺一氏は、

正信との年令関係から、師として最も適当なのは宗湛である。

と推定し、源豊宗氏はこの説を疑問視しているが、筆者は渡辺説を支持したい。そうすると、狩野正信と北房宗継とは兄弟弟子ということになる。「十僧図」を描く時、正信は、夏珪様と馬遠様とどちらで描きましょうか。西指庵の画は馬遠様ですから李龍眠様が適当だと存じますが——、^⑪八文明十七、十、廿九。同年、十一、二〇と進言し、東府（義尚邸は西府と称す）から北宋末の李龍眠（名は公麟。詩名も高い）の「文殊・維摩画」や八文明十七、十一、廿四。文明十八、四、廿九〇「老子渡関図」を借りている八文明十八、正、十九〇。画法や構図は横川景三・相阿と三人で協議し八文明十七、十二、十八、及び廿四日〇、

最終的には足利義政が決定して完成したのであるが、何様でも描きましよう」という言葉に、日本風漢画を大成させようとする正信の、研究心と自負心がよく表れている。これは北房にも通ずるものであった。「日録」にはこんなエピソードもある。

南伯が来訪し次のように話す。「海阿が逝去する前、夢に悦山相公（足利義尚）が現われ、『もし性玄、という者が薬を与えても服用するな』と仰せられたという。性玄とは誰ですか八延徳三、三、廿八〇。

傍点の語は、狩野正信も宗継と同様に医薬に関わっていた事を示しており、小さな傍証を積み重ねていくと、二人が兄弟弟子であるという筆者の推定はますます強くなる。兄弟弟子であったからこそ、

晩がた狩野法橋来るも面会せず、北房の描く障子画を見、一件一件批判する。盃を傾け浅斟低唱するのが一興で、予の誕生日を慶^いてくれた八延徳四、二、三〇。

という遠慮のない批判も肯けるのである。

夜来、藤左（後藤々左衛門則季）方より柳樽一荷贈らる。藤左・窪田藤兵衛尉らを招き明月を觀賞。藤左数曲唱う。晩がた窪田予の紙形を写すこと両三枚八延徳三、九、十三〇。

齋前、窪田予の紙形を写す。北房意見を加う八同月十四日〇。

窪田予の陋質を絵き持参。太^{はな}だよからず。（中略）北房・窪田を松泉にて齋す八延徳四、三、廿〇。

j より前に、亀泉は自分の頂相を窪田藤兵衛尉に描かせたが気に入らず、北房も批判を加えた。それなら何故宗継に依頼しなかったのだらう。北房宗継の画業一覧表を見てもすぐ分るように、彼は人物画は得

手でなく、最終的には將軍父子像の実績のある狩野正信に描かせたのである。

「はじめに」に記した如く焦点の定まらない文章となったが、蔭涼軒をめぐる禪院風景を読み取って下されば幸甚である。

注① 比較のために景徐周麟筆の『鹿苑日録』を読むと、「初更より坐禪。定鐘已後住持坐禪し八鼓に及び方丈に帰る」△長享二、正、二▽という坐禪の記事、「仏国録を読む。説法広大、機弁迅速なり。(中略)近時の無見識の長老云々」△延徳元、正、三▽と語録を読んで脚下照顧し、「早暁、五更の鐘を聞き入堂坐禪す。丈室に帰り華嚴經離世間品を読む。之を読み以て菩薩の深心を知る」△明応七、正、十▽という研鑽の記述が、後世の吾人を鞭達する。

② 『鹿苑日録』には、自往古如此者也。蔭涼季瓊、日記詳焉。△長享元、八、十一▽とあり、『日録』そのものにも、去年日録以忘念不記之故無御成。△長祿四・七・十四▽とか、早旦東啓又来伝縁西堂命云、蔭涼軒日録借預之者為幸。△明応二・五・十五▽という記述がある。

③ 自今夜初服用參香散。蓋北房秘方云々(延徳四・六・五▽)

④ 「わしの百病はなせ起るのか。思かなことよ、灸をしても全く無駄。」百病は言う迄もなく百八の煩惱。病源は心の迷いにあるのに灸治に頼るのは空しい。

⑤ 「長生きをお祝い申し上げます。老師は究極の道に到達しておられるのです。その高い禪風を敬仰致します」

⑥ 赤松政則の被官で美作の国人。亀泉集証の親族。

⑦ 『日録』に、自四宮四郎方丹瓜一荷贈藤左。々々乃以半荷惠予。△延徳四・七・廿一▽とあり、三人は交りがあった。

⑧ 昭和四十二年秋、京都博物館『室町時代の美術』及び昭和五十六年秋、同館『禅の美術』の際に展観。

⑨ 東山妙雲院を養徳院とした支証が紛失したので、天隱和尚は紛失状を

呈出すべき事を多賀豊後守に申す。浦上美作も之をうけて督促した。△寛正六・十二・十八▽。傍点を付した二人は共に播州の人で、春浦禪師と地縁がある。

⑩ 禅の境地を牛飼いに喩えた『十牛図』の第五に「牧牛」があり、いわゆる悟後の修行を図と頌で表わしている。なお『村庵稿』の「題宗、湛所画小景」に、老牛眠穩草如織避網遊魚水面涼、の句も十牛図に関連する。

⑪ 長享三年四月廿七日、美濃材木点検の為、集華監寺と大工太郎右衛門は大津に下向、六月三日に再建工事開始、地割は東西十二間、南北十六間一尺五寸というから百九十坪余の小じんまりしたものであった。七月廿三日に立柱してより建築は急ピッチに進み、書院・庫裏・客殿などを構え、亀泉集証は八月廿四日に移居した。愚(亀泉)密かに葉室公に謂て曰く「愚の私寮は松泉と号す。赤松兵部少輔(政則)檀那たり。△延徳二・九・廿一▽。上様問いて曰く「松泉は何処ぞ」答えて曰く「蔭涼軒の事なり。△延徳二・十・十二▽の記事を見ると公私混同の寮舎であった。

⑫ 松島宗衛「君台観左右帳研究」は古い本だが好参考文献。昭和五十三年十月大阪市立美術館『宋元の美術』でまとまって展観。

⑬ 以半は六月十四日に初めて松泉軒を訪れ、江戸の万里集九(詩人)の消息を語り、続いて廿六日、廿九日、七月廿七日など、北房と宴席に同席している。

⑭ 明応二年六月廿四日、建仁寺洞春院での作。同席の詩衆は、天隱龍沢、雪嶺永瓊、月舟寿桂(いずれも拙著『五山詩史の研究』で作家論を述べろ)をはじめとする廿五人であった。

⑮ 今日齋会下月、樊桂居士二十五年忌也。又三郎當之、△延徳三・九・一▽。樊桂居士年忌也。桂藏主宮齋、△明応二・九・一▽傍線傍点に留意すると有桂は佐用郡上月の国人上月樊桂居士の子で、上月又三郎則武の兄弟ではないかと思われる。

⑯ 竺英有桂の寮に「聯芳齋」と命名した景徐周麟は、その由来を述べて、

画僧月船宗継とその周辺

夫れ桂の芳有るや、月邦に発して上、月氏に逮ぶ」と記す。なお有桂の寮には春浦禪師（既述）の贊のある臨濟像が掛けてあった。

- ⑰ 雲頂院昭堂後門壁画観音并羅漢、今晨安置之。画師鹿野性玄。愚老施入之志為後証加名判、又書年月日也。御新造為御絵本、以大智院三幅、可被渡于宗、濫坊之由、能阿以折紙申之。

- ⑱ 渡辺一「狩野正信」〔美術研究〕一四一